

## 公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	Woody放課後等デイサービス 単位2			
○保護者評価実施期間	2026年 1月 13日 ~ 2026年 1月 31日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	16名	(回答者数)	15名
○従業者評価実施期間	2026年 1月 19日 ~ 2026年 1月 31日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数)	6名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月16日			

## ○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	病院勤務での理学療法士、大学教員、演奏家、看護師、介護現場職等、様々な職務を経てきた職員や保育士・児童支援員等の職員が従事していることで、多岐にわたり児童の成長支援に貢献できる。「視点の分散」による「主観の偏り」を相互に修正したアセスメント・サポートが可能である。	「医学」という科学的背景を持つ分野において、「普遍性・客觀性・理論性」は不可欠な土台である。療育においてもこれらは「作り立べき」ものであり、現代の支援の根幹をなすものであると考える。よって、「普遍性・客觀性・理論性」を伴わない指導は、単なる「個人の感想」に過ぎない。児童の特性を考慮し、科学的フィルターを通した支援をスタンダードにすることこそが、児童の権利を守り、その成長を最大化することであるとの意識で取組んでいる。	療育は「生活と人間」に向き合う側面が強い分野であるため、病気を診る「医学」という純粋な自然科学とは異なる難しさがある。そのため、時には非科学的な療育や、医学的根拠の乏しい手法が流布することもある。「情熱」や、「経験」はもちろん重要ではあるが、それらが科学的なフィルターを通して初めて有効な「支援」へと昇華される。しかしながら、「目の前の人に対する柔軟な配慮」も忘れてはならない。最大限の支援効果を引き出すために常に情報アップデートしていく。
2	外部からの個人興行主や団体などを招待し、他事業所を巻き込みイベントとしてエンターテイメント、芸術文化に触れる機会を持っている。	デジタルソースは昨今の主流であるが、デジタルでは伝わりきらないエンターテイメント、芸術文化を児童たちが直接体感できる臨場感あふれる場を事業所自らが企画運営し提供している。	今後も様々なエンターテイメント、芸術文化に触れ、家庭では経験できないこと等を計画、実施していく。公民館等を活用し近隣住民の参加も宣伝し、地域貢献にも努めていきたい。
3	法人の複数の各事業所運営を活かし、異なる特性や年代の児童が交流・協力して一つの目標を成し遂げる、非日常的な体験の場を提供している。	児童が学校や地域社会との密な関わりを持つ準備段階として、法人内における各事業所間の連携促進（合同イベント活動）をすることにより、幅広い年代・特性の児童が日常とは違う環境でコミュニケーションをとって協力し、達成感を共有することで社会性の能力向上が期待される。	「毎年の恒例行事により、垣根を超えた交流で育む協力心に繋げていきたい」 このスローガンのもと、私たちは事業所間の連携をさらに強め、児童が多様な仲間と共に手を取り合って未来へ進む力になるよう支援していく。

	事業所の弱み（※）だと思われるること ※事業所の課題や改善が必要だと思われるること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員の急病等での人手不足により適切なサポートが行き届かない時が挙げられる。このような急病等はやむを得ない事情だが、様々な形態、角度から職員の雇用を検討し、突発的に起こり得る人手不足に対応できる人員体制の強化を図らなければならない。	パート従業員、兼務職員又常勤職員も含めて日々の療育に従事しているが、仕事の性質上、疲弊、ストレスが積み重なることがある。職員個人の意見を十分に聞き、少しでもストレス軽減の一助になるような取り組みを行う必要がある。	パートやアルバイトなどの採用も多角的、多面的に検討し、利用者や従業者に疲弊、ストレスに繋がらないような配置の方法を検討する。また従業員にはリフレッシュのため有給などの利用も積極的にすすめる。また、様々な声を聴く意見箱の設置も常に検討している。
2	療育に必要であると思われる活動が、時として児童に興味を持ってもらえず、昨今の流行に沿った遊びが活動として人気を占める等、様々に乖離を感じる。各児童の特性に合わせた最適な充実した活動が必要であり、それに興味を持たせる方法の検討が課題として挙げられる。	何を療育の目的とした活動にするのかを考慮しながら活動を作成しているが、計画通りに進まず活動が不十分な場合や児童が興味を示さなかった場合等における、振り返りミーティングの重要性がある。	活動の目的、何を課題とするかなどを考える上で、既に行つた活動のトライアンドエラーもチームで考えていく。ミーティングにより試行錯誤した多数の視点からの活動を取り入れていく。
3	ペアレントトレーニングや家族が参加できる研修が不足している。	職員によるペアレントトレーニング研修が実施できていないため、職員自らの受講又は講師を招いての研修等が検討課題となっている。	職員がペアレントトレーニングの講習や研修を受講することで、その内容を子育てに悩みを抱えている保護者へ還元することで、その悩みを抱えている保護者の児童の行動変容を目的とする養育スキルを保護者が獲得する機会を提供すること。